

配信中なのに

クソニをやめて

くれません!!

趣味のゲーム実況をしてたら

1ヶ月ぶりに無沙汰だった恋人に

体中好き勝手されて、

リスナーにバレないように

声を抑えるも呆気なく絶頂する話



「配信中なのにクンニをやめてくれません！趣味のゲーム実況をしてたら一ヶ月ご無沙汰だった恋人に体中好き勝手されて、リスナーにバレないように声を抑えるも呆気なく絶頂する話」

「事前に告知してた通り、一四時から配信を、します……っ」と

土曜の昼下がり。ベッドの上に寝転がりながらぼちぼちとスマホに入力をしていく。

文章を作成してざっと内容に間違いがないか確認したら、某眩きSNSの投稿ボタンを押す。

「あ………」

アップしてすぐ、投稿にいいねがついた。

『お、楽しみにしてまーす！』『例の新作やるんですね！めっちゃ面白いですよ』といった感じにいくつかのアカウントからリプライもきて。

細々と活動している私にも楽しみに待っていてくれる人がいる事が嬉しくて顔が綻ぶ。

「ふふ……久しぶりの配信だあ。ずっとやりたくて我慢してたゲームだから楽しみだなあ」

そう呟いて軽く伸びをした。

ネットでゲーム実況の配信を始めてからもうどれくらい経っただろうか。

ゲーム好きの兄の影響で私も生粋のゲーマーへと成長してしまったが、それを誰かと共有する機会がなくて。

大学進学の一人暮らしを機に、ゲームが好きな人と緩く雑談をしながらやれたらいいなあ、くらいの気持ちで始めたのがきっかけだった。

「最初の頃に比べたら、見てくれる人も随分増えたなあ……」

もちろん大手の配信者とは比べ物にはならないけど。不定期配信のうえに顔出しもしていないのに、こうして見に来て、ましてやコメントをしてくれる人がいる事はただただありがたい。久しぶりだし始める前にマイクやPCのチェックでもしておくかと、ベッドから起き上がったその時。

ピンポン

「ん？」

不意に、部屋のインターホンが鳴った。

何か頼んでたっけ……？

パッと思い出せないけど、ネットで買い物をする事が多いので特に深く考えず「はい」と返事をする。

パタパタと廊下を進み玄関を開けると。

「って、え!？れ、廉くん!？」

「いや、危ないから確認してからドア開けなよ」

予想外の人物に素っ頓狂な声をあげてしまう。

驚く私とは対照的に、冷静にツッコミを入れる背の高い、明るい茶髪の男の子。

そこに立っていたのは、付き合って一年になる彼氏の廉くんだった。



「あ、あれ？約束は明日じゃなかったっけ？」

とりあえず廉くんを部屋に通し、戸惑いながらそう問いかける。

このところお互いバイトやレポートが重なって中々会う時間が作れなかった。

やっと山場を超えたので明日はまったり私の部屋でお家デートをしようという話をしてたはず……だったけど。

「いや……？今日ってメッセージ送ってたんだけど……もしかして日付勘違いしてた？」

「……っ！！」

その言葉に嫌な予感がして慌ててスマホを取り出す。

廉くんとのやり取りを見返すと確かに土曜日……つまり「今日」我が家に遊びに行くメッセージに書いてあった。

「~~~~~っ！！ご、ごめん！！曜日間違って覚えてたみたい……！！」

完全なる自分の思い違いに血の気がサーッと引いていく。

真っ青になりながら勢いよく頭をさげる私に少し苦笑しつつも「そんな謝らなくていいって」とニコッと笑う廉くん。うう……久しぶりの朗らかな笑顔が申し訳ない。

「でも、今日梨乃が家にいてくれて良かった。ここ最近お互いバタついてたからさあ……こうして二人で会えるの……一ヶ月ぶりくらい？ずっと会いたかった」

「廉くん……」

そう言ってぎゅう、と包み込むように抱きしめられる。もちろん私も同じ気持ちで。

日付を勘違いしちゃってたけど……私だって廉くんと会えるのずっと楽しみにしてた。

久しぶりに感じる彼の体温と匂いが心地よくて、自分のミスに強ばってた体の力がふにやりと抜けていく。

「私も会いたかった……日付、勘違いしちゃってごめんね」

「別にいいよ。こうして会えたし……あゝ、久しぶりの梨乃はやっぱいいな……HPが回復する」

「ふふ、何それ」

そう言つて私の頬にぐりぐりとその明るい茶髪を擦り付けられる。柔らかい猫毛がこそばゆいけど、その仕草が可愛くて。つい、されるがままになつてしまふ。

「大学ですれ違つてもほとんど話せなかつたもんね。講義もあんまり被らなかつたし」

「ほんとにな。というか梨乃、大学で話しかけるといつもよそよそしいじゃん。そそくさとすぐ切り上げてどっかいっちゃうし」

「う……だ、だつて廉くんの周り……いつもキラキラな人達が集まつてるから……こんなのが彼女つて思われるのがいたたまれないんだもん……」

廉くんとは同じ大学の同級生で、付き合つてもうじき一年くらいになる。

お世辞にもキラキラな女子大生☆とはいえない、地味でパツとしない平々凡々な私と、整つた容姿に人を引きつける、お日様のような明るい性格。いつも男女問わず人に囲まれてるような廉くんがなぜ付き合つているのか、一年経つた今でも未だに謎だ。

「なんだそりゃ。いつも言つてるけどそんな風に思つたりしなくていいつて。というか、自分

の事……俺の大切な彼女をこんなやつて言うな」
「そ、それは……ごめん。あまりにも住む世界が違いすぎて……」

大学ではなるべく目立たないように振る舞い、休みの日は細々とゲーム実況をする、という生活を送る私とは対照的すぎる集団について、いつも気後れしてしまう。

この卑屈すぎる性格もいい加減直さなくちゃいけない。しゅん……と謝る私の頭を廉くんがぼんぼんと優しく撫でてくれる。

「でも、居心地悪くさせちゃってたならごめん。まあ、気になるなら今度から俺が一人の時に梨乃に話しかけるよ」

「うう……ありがとぅぅぅ」

正反対であろう人種の私と廉くんがなぜ付き合っているのか。

廉くんとは知り合ったきっかけは、授業のグループワークだった。

私の何処に惹かれてくれたのか正直検討がつかないけど……そこで少し会話をした日を境に、講義が一緒になった時や構内ですれ違おうと何かと話しかけてくれるようになって。

最初はあの人気者で目立つ存在の廉くんがなぜ私に……!?と、戸惑ってばかりだった私も、

徐々にぎこちなさが消えて自然に他愛もない会話が出来るようになった。

……ある日廉くんから「付き合って欲しい」なんて告白された時は心臓が止まるかと思っただけ。

「あ」

「……ん？どうかした？」

お互いの体温を分け合うように暫く抱き合っていると、廉くんが何かを思い出したかのような声をあげる。

肩を軽く掴まれて体を離されたかと思えば、私のことを上から下までまじまじと見つめてくる。

「最初会った時からずっと思ってたんだけど……梨乃のその格好さあ……」

「ん？この部屋着のこと？……あ、ご、ごめん、今日誰とも会わないかと思ってたから」

何か言いたげなその表情に、慌てて弁解をする。

今日は特に外出の予定もなかったので、キャミソールの上に薄手のカーディガン。ショート

パンツというラフな格好だ。

確かに廉くんの前ではあんまりしたことがない格好で、だらしなかつただろうかと不安になる。

「す、すぐ着替えるから……」

「いや、いいって。普段と違って可愛いんだけど……上からみると胸の谷間がつつり見えるなって」

「……っ！」

「ははっ、反応早っ」

その言葉に反射的にバっ！とカーディガンで前を隠す。

顔に一瞬で熱が集まる私をみて、廉くんがにやりとちよっと意地悪な表情になった。

「こ、これは……気が付かなくて……」

「顔真っ赤にして恥ずかしがって……普段、もっと梨乃の恥ずかしい場所見てるのに。ほんと……付き合って一年経つのに、いつも反応が新鮮でかーわい」

「~~~~~っ」

「そんな男を誘うような無防備な格好してるのに、相手も確認せず玄関のドア開けちゃってさあ……俺じゃなかったら襲われてたかもしれないよね」

「……っご、ごめんなさ……」

確かに廉くんの言うことはもっともだ。何も言い返せず、自分の不用心に素直に反省する。

「全く……危なっかしいなあ……最初見た時、俺もグラツときたけどね。正直玄関でそのまま押し倒そうかと思った」

「れ、れんく……っ」

そう言ってちゅ♡と音を立てながら首筋に唇を落とされる。一瞬掠めていった熱に、体がピクリと跳ねた。

「は……っ、ん……」

「ん……」

ちゅ♡ちゅ♡と首筋を食みながら徐々に下に降りていく唇。くすぐったさと同時にぞくぞく

としたものが背中を走っていった。

「ちゅ……ちゅう♡」

「っ！」

最後、胸元に強く吸い付かれて息が詰まる。

見るとそこには真っ赤な跡がくつきりついていた。廉くんの舌が跡をなぞるようにゆつくりと這う。

「……ふ……れ、れんく……ん」

「ん……一ヶ月前に付けたのはもう流石に消えてるか。梨乃の真っ白で綺麗な肌によく映えるから……何度でもこうして跡つけたくなる」

「ん……！ふ、ちゅ……♡」

「……ん」

顎を軽く指ですくい上げられて、廉くんのアーモンド色の瞳と見つめ合う。

そのまま唇を優しく奪われて。柔らかい唇が何度も角度を変えながら吸い付いてくる。

久しぶりのキスは触れ合ってる部分がジン……♡痺れるぐらい気持ちいい。拙いながらも自分も精一杯応えた。

「ん……は、あ……」

「ふ、はっ……んう……♡」

「ん、上手。目、とろんて溶けて、えっちな顔になってきた」

「だ、だって……っ、久しぶりのキス、気持ち……」

「っ！は……素直で可愛すぎ」

「ひゃっ」

そのまま軽々と抱き上げられたかと思いきやボスンッ！とベッドに押し倒された。

驚いて小さく悲鳴をあげると、私の上に覆いかぶさってきた廉くんの舌がその隙間から口内に入ってくる。

「ん、ふっ♡……ん……は、♡♡♡♡♡」

逃げる暇もなく絡め取られて、にゅぷ……♡にゅぷ……♡と舌同士を擦り合わせられる感覚

にお腹の下がじわじわ熱を帯びていく。
最後にえっちをしたのも一ヶ月前で。廉くんから与えられる刺激に、快感に飢えた体は簡単に火がついてしまう。

「ふ……う……っん！♡」

深いキスに夢中になっていると、するりと腰を撫でていく手。そんな刺激にすら甘い声が漏れてしまうも、もっとその先をしてほしくて。広い背中に腕を回す。

（廉くんとのキス、気持ちいい……♡私の体……簡単にえっちな気分になってきちゃった……この先の事期待して……腰くねくねさせちゃう……♡）

「っはあ……腰揺れてるんだけど、まだ、キスただけなのにそんな期待してくれてるんだ？」
「っ、ごめんなさ……っ」

「謝らなくていいって。ちゃんと期待通り、梨乃の弱いところいっぱい触って、気持ちよくしてあげるから」

下脱がすから腰あげて？と囁かれた。

余裕のない、えっちなその表情から廉くんも興奮してくれてるのが分かって、これから起くる事に胸がドキドキしてしまう。

言われた通り、大人しく腰を浮かせようとしたその時。

(……………あれ、私……………何か忘れてるような……………?)

快楽にのまれようとした頭の中に一瞬浮かぶ疑問。

なんだろう。とてつもなく大切なことを忘れてる気がする。

「……………?」

「ん、どうしたの？」

ふと、廉くんの肩越しに壁掛け時計が目に入る。時刻はもう少しで一四時を指している。

(一四時……………?私……………一四時に何かやろうとしたような……………———!!)

「あ——！」
「わっ、なにっ!?」

突然大声をあげた私に廉くんがビクッと肩を震わせた。



「こんにちはは、Rです！今日は発売からずっと楽しみにしてたこちらの王道RPGゲームをやっていききたいと思います〜」

コントローラーを握って、マイクに元気よく話しかける。

ゲーミングチェアに座りながらモニターを眺めると、始めたばかりなのにもう二桁程人が集まってきてくれていて。いつもの常連さんたちのコメントがちらほら流れていく。

「わ、今日、見に来てくれる人多い……！いつもありがとうございます」

(はあ……はあ……な、なんとか間に合ってよかった……)

表には出さないが、内心は息切れ状態だ。

あの後、ベッドから跳ね起きると、廉くんに事情を説明し、慌てて配信の準備をした。

一四時ぎりぎりに始めることができ、胸を撫で下ろすも、背後にいる廉くんの様子が気になつて仕方がない。

(もう告知も出しちゃってたから、中止にもできないし……分かった。って言ってくれたけど、流石に廉くんも、怒ってるかも……)

せつかくの良い雰囲気……ましてや一ヶ月ぶりのえっちに流れ込みそうだったのに台無しにしてまって、申し訳なさで胸がいつぱいになる。

(私もえ、えっちしたかったけど……もう……なんでメッセージの日付読み違えちゃってたんだろう……私のばか……っ)

せめて今日はなるべく早く切り上げようと決意をする。

ちなみに廉くんは私がゲーム実況をして配信をしている事も知っている。ただ、こうして目の前で実際にやっているところは恥ずかしいのであまり見せたことはないけれど。

(自業自得だけど……知り合い……とか彼氏に見られるの緊張するなあ……でも、集中しないと……廉くんには終わるまで好きにしていって伝えてるし……)

終わったら廉くんに改めて全力で謝って、きちんと埋め合わせをしよう。そう決意をし、コントロールを握る。

「じゃ、早速スタートで……っ!？」

スタートボタンを押そうとしたその時。

する……と背後から胸の前に腕をまわされる。

突然の事に驚いて思わず後ろを振り返ると、そこにはどこことなく楽しそうな表情をした廉くんが立っ

——その顔がえっこの時の少し意地悪な廉くんと重なって、ゾクリと嫌な予感がした。

……くりっ♡

「っ!!」

突然の刺激に体がビクンッと跳ねる。

嫌な予感的中して。キャミの上から胸の先端を指でピンっ♡と弾かれる。

(れれれんくん!? え、なに……!? ど、どうして?)

もちろん声に出す事は出来ず、口をつぐんでなんとか堪える。困惑しながらも目で必死に廉くんに訴えると、耳元に顔を寄せてきて。

「好きにしていっていいって言ったでしょ? 俺は勝手にさっきの続きしてるから……梨乃はそのまま配信続けてて?」

「っ!?!」

マイクに入らないくらい小さな声で囁かれた。

聞き間違いであってほしい爆弾発言を告げられて、頭が真っ白になる。
戸惑う私をよそにそのまますり……♡すり……♡胸の突起を指の腹で撫でられ、体が震えてしまう。

「……………っ♡」

「ほら、ちゃんと配信続けないと。リスナーさんが心配してるよ？」

誰のせいで、と言いつ返したい。

ただそんな事声に出す訳にもいかず、なんとか平常心を保ちながら配信を続ける。

「……………し、失礼しました。じゃ、早速やっていきますね……………っ♡」

(ど、どうしてこんな事……………っ！あ……………っ♡ち、乳首、キャミの上から……………爪で引っ掻かれて……………)

カリ……………♡カリ♡カリカリ♡

不規則な指の動きに翻弄されてしまう。

今日は人と会うとは思わなかったの、ノープラで過ごしてたのが仇になってしまった。

「っ、あ……こ、これグラフィック凄い……さすが発売前から評判良かっただけ、あ、りますね……っ♡」

声が震えそうになるのを必死で抑えながら実況を進める。

敏感なそこが徐々につくりと膨らんで、キャミを押し上げるように生地の下から主張をしている。爪がカリ……♡と掠める度に生地と突起が擦れて、触られているところがビリビリした。

(……っ、だめ、両方の乳首そうやって触っちゃだめ……え……っ♡お腹の下キュンキュンして、切なくなっちゃう……♡ゲームに集中したいのに、内容が頭入ってこない……♡)

カリ♡カリカリカリ♡

指の動きは相変わらず変わらない。この一年間で散々廉くんに開発されてよわよわになった乳首は簡単に気持ちよくなってしまうって。

「と、とりあえず、そ、装備。装備揃えなきゃだから、街の方にでてみま……っ、ひゃあっ♡」
背中を丸めてなんとか快感から逃げようとする、それを嗜めるように両乳首をぎゅう♡と摘まれてしまった。

「っ、声もれてしまい『え、どうした？』『大丈夫？』と私を心配するようなコメントが流れてしまう。」

「……こら、逃げようとしない。梨乃の雑魚乳首、指で弄られながら、ちゃんと変態配信して？」

「っ、……ふ……♡」

乳首をぐゅ♡と引っ張られて、胸を張るように姿勢を矯正される。

「またも耳元で囁かれ、ぼそぼそと頭に響く低音にすら体がピクピク反応してしまう。」

「ごめん、なさい……っ♡部屋の中に虫がいて……ちょっとびっくりしちゃって……っ」

「苦しい言い訳でなんとか乗り切る。この状況がいつまで持つか分からなくて、冷や汗が吹き

出してきた。

(あっ……♡ち、乳首……さつきと触り方変わって……指でくりくりこねられてる……っ♡こ、これ、刺激強くて……声漏れちゃ……♡)

「え、えっとお……♡っあ……さ、さつきの続き……っ、とりあえず街を目指しますね……♡」

くり♡くりくりくり♡……きゅ♡

親指の腹で小刻みに乳首をしごかれたかと思うと、不意打ちで力を込められて。

腰がぞくぞくして気持ちいいがどんどんお腹の底に溜まっていく。太ももをもじ……と擦り合わせてなんとか快感に耐えていると。

「……………！」

片方の手がゆっくりと下に降りてきた。

閉じている太ももを開かせるようにすり……♡と撫でられる。

「……足、開いて？」

「……………っ♡」

小さい声で指示をされ、これからどこを触られるのかわかってしまった。

“そこ”を触られるといよいよ声を抑える自信がない。逡巡していると、またもう片方の手で乳首をぎゅゅ♡と摘まれて大袈裟に体を跳ねさせてしまう。

「ひっ♡」

「ん？聞こえなかった？梨乃のまんこ触るから……ちゃんと足開いてって言ってんの」

「……………っ」

小さい子を叱るように、廉くんの語尾が少しだけ低くなる。このまま言うことを聞かないともっとと激しい事をされてしまいそう。

こくこくと頷きながら、ゆっくりと脚を開いてがに股座りになった。

「ん、いい子♡」

「……………っ」

下に降りてきてた手が、ショートパンツの上からすり……♡すり……♡と指でおまんこの割れ目をなぞる。

薄い生地で覆われてるそこは先程の乳首への愛撫で、じんわり染みを作っていて。指を動かす度に微かに、くち……♡と水音が出てしまう。

「ん……♡そ、装備、どうしよう、かな……あー、なるほど、っ、この上から二番目のやつ、おすすすめな、ん……ですね……♡」

こんな状況でも流れるコメントを確認しながらなんとかゲームを進めていく。

廉くんが指を動かす度に、微かに聞こえてくる水音がマイクに入ってしまったかひやひやしてしまう。

「じゃ……あ……♡戦う準備できたので、ストーリー進めて……んっ♡……行きたいと思えます……っ」

街にいたキャラクターに話しかけるとムービーが始まった。正直もう全然内容が頭に入って

いかないけど。

コントローラーを握りしめて、なんとか平常心を保てるように努力する。

くに♡くり♡くり♡くり♡

ずりゅ……♡ずり……♡

「あ……っ♡こ、声、変ですか……？ちよつと最近風邪気味で……っ、喉にきちやったのかも……っ♡♡」

（あっ……あ~~~~♡♡りよ、両方だめ♡乳首こねこねしながら、おまんこなぞらないでえっ♡♡）

同時に責められて、甘い疼きがどんどん募っていく。

こんな事やめてもらった方がいいのに。体はもつともつと触って欲しいといわんばかりに胸もおまんこも前に突き出してしまふ。

「はは……リスナーさんに聞かれるかもしれないのに、興奮してる？……服越しなのに乳首ピンピンに勃起してるの分かるし、ショートパンツもまんこのとこ色変わってるんだけど」

「…………う、…………ふう…………♡」

「それ睨んでるつもり？目うるうるさせて、上目遣いで可愛いだけだよ」

凶星を突かれて精一杯の力で廉くんを睨んでみるも効果は全くないようだ。

楽しそうに口角をあげる廉くんが、不意に私が座っているゲーミングチェアを後ろに少し引いた。

それによってモニターが乗っているデスクとイスに座っている私の間に空間ができる。

「……………?」

「気にしなくていいから、そのまま続けてて?」

意図が分からずきよんとしていると、そう囁かれる。できた空間に廉くんがしゃがみこんできたと思ったら——おもむろに下着ごとショートパンツを下ろされてしまった。

「……………っ!!」

悲鳴をあげなかった自分を褒めたい。

突然のことに思考が追いつかず固まっていると、膝の裏を持ち上げられて、足をぱかりと開かされてしまう。

(こ、これ……おまんこ、丸見えになっちゃう……)

そのまま両足を椅子の肘置きに引っ掛けるようにおかれて、所謂M字開脚と言われる体勢にされてしまった。

廉くんの眼前には、くぱ……♡くぱ……♡と愛液を垂れ流しているおまんこが差し出されている。

「は……すつご……びしょびしょじゃん」

「……………っ」

ぼそり、と呟かれた言葉に顔が熱くなる。

廉くんがそこで喋ると、吐息がおまんこにかかって小さく腰が跳ねてしまう。

「……………ん」

「……ひっ……い……♡」

ぬる……♡にゆる……♡

廉くんの顔がおまんこに埋められて、そのまま周囲の愛液を舐めとるように、ぴちゃ……♡と熱い舌が這っていく。

決定的な場所には触れず、焦らすような舌の動きがもどかしい。無意識に腰が揺れてしまう。

「っ……♡♡じゃ、あ……西の森に行けとの事なので……そこを目指し、ながら……あ……♡♡レベル上げて、っ、いこうかな……♡」

なるべくモニターに意識を集中させるも難しくて。

下半身から微かに響いてくるぴちゃぴちゃとした水音が、余計に興奮を駆り立てる。

「あ……さ、早速バトルで、す……ね……♡最初なので、と、りあえず……♡無難な戦法で……」

(っ♡ふ、う……♡っ♡廉くんの舌が……ずっとおまんこの周りペロペロ舐めてて……集中で

きないよお……っ♡時々吐息が敏感なとこ当たって……こ、声、でちゃいそうになる……っ♡♡~~~~~っ♡も、もっと、周りじゃなくて……おまんこも舐めて欲しい……♡)

散々溜まった快感が体の中でぐっぐっ沸騰して辛い。もっと直接的な刺激が欲しくて、はしたないのに腰を前に突き出しておまんこをアピールしてしまう。

「はあ……えろ♡……ん」

にゅぶぶぶぶぶぶ……♡

「ふっ……ぐ♡」

(あっ♡あっ♡し、舌挿入ってきたあ……っ♡♡)

私の必死な行動に廉くんが恍惚とした表情で笑う。

おまんこの入口にゆっくりと舌が侵入してきて、ぞわぞわとした快感が全身に走る。

「~~~~~っ♡は、あ……♡とりあえず……っ、最初の戦闘は終わり……です、ね……っ♡技の組み合わせ方が……っあ♡まだ、慣れてないので、……ん♡数をたくさんこなしていき

いと思いま……っ、す……う……っ♡

ぬぽ♡ちゅぷ♡ぬぽぬぽ

廉くんの舌がナカの膣壁をぞりぞりとなぞる。えっちな音を立てながらおまんこを抜き差しをされて、つま先をきゅう♡と丸めて必死に耐える。

(あ~~~~~♡やば……♡おまんこ舌でピストンされるの気持ちい……っ♡ナカで舌がにゅるにゅる動いて……さつき舐め取られたばかりなのに……愛液奥からじゅわって滲んできちゃう……っ♡)

このままだとすぐ絶頂してしまいそうで下腹部に力を入れて我慢する。
震える手でコントローラーを握り直し、モニターに集中していると。

「ん……あ……っ♡へ、へー……こ、こっちにも、アイテムが……はっ……♡あるんですか？
じゃあ、一応拾って……ひざっ！♡」

くりゅ♡と、もうすっかり主張をしていたクリトリスを指で撫でられた。

